

宮崎市の神楽の音楽 (IV) ①

— 広原神楽と島之内神楽 (i) —

黒木 亜美子

The Music of *kagura* in Miyazaki City (IV) ① : HIROHARA KAGURA and SHIMANOUCI KAGURA

Amiko KUROKI

1. はじめに

前回^{#1)} (黒木, 1986) の論の最後に少し触れていたが, 現在の宮崎市の北部の佐土原町と接する海岸地方から西部の国富町に接する区域 (地図参照) にかけては, これまで報告してきた生目, 小松, 大島神楽とは多少異なると思われる系統の神楽が存在している。即ち, 太鼓に杵打ちがあること, 笛が縦笛であること等々がその共通する主立った音楽的特徴と推察できる神楽がある。このグループは, 新富町の新田神楽, 佐土原町の巨田神楽等ともつながりがあるように思われるのだが, それらの地域の神楽全てを比較対照したわけではないので, 現時点では, 前記の推察に基づいて取材を続けているところである。今回は, そのグループの中で広原神楽と島之内神楽について概説したい。

なお, 両神楽共にまだ完全に把握してはいないので, 昭和60年の広原神楽と島之内神楽の春の社日 (3月20日) での奉納の取材及び同年の島之内神楽の秋の社日 (9月26日) の奉納, 広原神楽の秋の大祭 (11月17日) と翌61年秋の大祭 (11月16日) での取材の概略レポートという形をとる。また, 広原神楽の伝承者であり, 前述の新富町, 佐土原町の神楽並びに島之内や新名爪, 那珂地区の神楽についても詳しい井野正氏へのインタビュー (昭和60年3月3日) も重要な資料とした。なお, 井野氏は昭和36年より広原神社の宮司を務めておられ, 神楽歴20年で太鼓の伝承者でもある。

2. 歴史的概略^{#2)}

日向国那珂郡の内の荘園として「広原荘」の名が鎌倉期から戦国期にかけて使われており, 現在の宮崎市広原・島之内を中心とする地域であったという。建久8年 (1197年) の「日向国国田写帳」によると, 日向国宇佐宮領の一部であったという。建武5年 (1338) 卯月7日畠山直顕下文 (郡司文書/南北朝遺1164) によれば, 北朝方の日向国国大将畠山直顕は「広原庄地頭代職」に那珂盛運を補任したといわれ, 広原荘の地頭職は足利氏の北朝方が掌握したと思われる。その後,



佐土原の大光寺（建武2年開山と伝えられる）の寺領地としてその名が現れている。大光寺文書によると、応永4年（1397）に同寺は「ミネサキ」「シヤウ小田」「外丸」「内丸」「丸牟田」「長牟田」の地を広原楠別符内の寺田として所有していたとのことだ。また、応永28年（1421）の「五郡田代写」に「広原社120町」と記され、天文2年（1533）には「宇佐宮領根本注文」に「広原庄130町」の記述がある。天正19年（1591）の「日向国五郡分帳」には、「広原120町」と記され、宇佐八幡宮系の社領地でもあったようだ。

江戸期に入ると、佐土原藩領那珂郡の中で、元禄3年（1690）に藩主島津惟久により島津久寿に広原村から島之内村と塩路村が3000石分として分知された。

明治21年までは、佐土原島津藩内の5村として広原村・島之内村・塩路村・芳土村・新名爪村（うち広原村と新名爪村が佐土原本藩領で、芳土村は元禄の分村時に新名爪村から分かれて分知久寿領となった。）が在ったが、明治22年（1889）に合併して昭和32年に至るまで住吉村と総称され、旧村名は大字名として残った。昭和32年（1957）に宮崎市の一部となり、村制時の5大字はそのまま同市の大字に継承されている。なお、各旧村毎に神社が存在し、神楽が奉納されていたが、現在まで伝承されているのは広原神社と、島之内と新名爪の各八幡神社の3箇所のみである。

なお、旧住吉村内には芳土に横穴式と前方後円型の古墳があったり、島之内八幡神社近くの瓢形墳（白鳳山古墳）、日向住吉駅近くの千丈古墳等があり、古墳時代の大集落と豪族の存在が想定できよう。また、神代の伝説の伊弉諾尊が黄泉の国より戻って身を海水に浴し、禊祓したと伝えられる櫛ヶ原（阿波岐原）はこの地方の海岸であったと言い伝えられており、その時に生まれた三神を祀った住吉神社が塩路地区に鎮座している。この地方では、今でも朔日と15日に浜に下りて身を清め、海中の砂を取って藁包に入れて持ち帰った後、家の内外にその砂をまいて清める習俗があると言う。

3. 広原神社と島之内八幡神社の由来と祭

前述したように、歴史的に宇佐八幡の社領とされていたことから、両社ともに宇佐八幡宮と関係が深いように思われるが、いずれも正確な創建年代は伝えられていない。

まず、広原神社であるが、同社宮司の井野正氏（前出）によると、もとは山王社と称して極楽寺と隣接していたことから、同寺の守り神として祀られたのではないかとのことである。同寺の仏像が鎌倉時代の作とされており、神仏混淆時代の合祀例であろう、と考えられるらしい。江戸時代までは同社は極楽寺の管轄であり、棟札や絵馬に僧侶名が入っているそうだ。平部嶮南は、「日向地誌」の中で「広原社は宇佐八幡宮を勧請したもの」と述べている。

祭神は大国主命・少彦名命・手力男命であり、摂社に通称平大明神という三野神社があり、大国主命が祀ってある。3月と9月の社日（彼岸の中日に最も近いつちのえの日）祭と11月15日の例祭（現在はこの日に近い日曜日）に神楽が奉納されるが、いずれも昼神楽である。

島之内八幡神社も、由来不祥であるが、西海大地震後の寛文4年（1664）11月再興の記録があるという。しかしながら、慶長5年（1600）の伊東氏と島津氏の戦の際に焼失し、古文書等が残っていないので、それ以前のことは皆目分からないということだ。^{※3} なお、祭神は足仲彦命（仲哀天皇）、誉田別命（応神天皇）、息長足姫命（神功皇后）で、誉田別命の故事^{※4}により幼少の子

の守り神として信仰を集めている。この社の例祭も11月15日で、夏祭（旧暦6月30日）にはみこしが出て13区会内を回る。神楽は例祭に一番ぐらい舞われることもあるが、七五三参りを主目的としてあり、従って春と秋の社日祭にのみ神楽が奉納されると言ってもよいであろう。特に秋の社日は早朝から午後3時過ぎぐらいまで、幼稚園児の見学も含めて盛大に奉納される。

なお、広原神社・島之内八幡神社共に、以前は厳密に神楽奉納日の早朝に浜下り神事（みこしを海辺まで運んで伶人たちは海に入り真砂を集めて精進潔斎する）を行っていたが、現在は簡略化されたり省略されたりしているようだ。

4. 神楽について

(1) 広原神楽

○神楽の由来と目的

この神楽がいつ頃から奉納されていたかは定かではない。しかし、もし、神社創建時よりの奉納であるならば、能成立以前の古いもの、ということになるであろうが立証は難しいだろう。井野氏によれば、古くとも室町時代末期ごろのものではないか、とのことである。

春の社日の朝に神様をお迎えし、秋の社日にお帰り願うので、春は朝、秋は夜に御神酒や御飯を供えるという。戦前までは、夜明けから日没まで33番を舞い通したとのことだ。11月の大祭は、大正時代末期に、旧住吉地区と佐土原・広瀬・那珂地区の秋祭を11月15日に統一したもので、豊年感謝の祭である。広原ではこの祭のことを“ホゼ”と呼んでいる。これには3つの語源があると言われており、1. 豊年祝の感謝（豊歳）^{ホウサイ} 2. 報賽^{ホウサイ} 3. 放生会の放生^{ホウジョウ} の3つのどれかが転化したものと考えられているようだ。旧暦8月15日に主立った八幡宮で放生会を行うことから、3を最有力説とするのが井野氏の見解である。神社の由来で述べた通り、広原神社は宇佐八幡宮と関りがあり、放生会が同時に豊年感謝の祭となったのではないかと、とのことである。ちなみに、神楽が奉納される神社に八幡様が多いのも事実である。

ところで、以前（昭和30年頃まで）は、舞手（伶人）のことを願祝子^{ガンボリ}と言って、神と共に在る、神に奉仕する人々として扱い、他の人々は娯楽として共に舞ったり見たりして楽しんでいたという。この願祝子は、親が神に願って舞手としてもらうもので、神社の鎮座する極楽寺地区の人々により伝えられ、同地区の殆ど全ての戸数を含み、親子そろっての奉納も多かったようだ。また、33番のうち初3番と末3番を大事にしている、日の影を測って厳密に奉納したという。

現在はそういうことにはこだわっていないし、また、時期的にハウス園芸の仕事等が忙しいこともあって、最も盛大なホゼの時でも午前中のみで終了している。

なお、現在の伶人は16名で、うち1名は病氣療養中につき、実際に神楽奉納にあたるのは15名である。年代別には、70代3名・60代1名・50代2名・40代1名・30代4名・20代4名（昭和60年現在、病氣療養中の1名は70代）となっており、比較的若い舞手によって継承されているが、手力男の舞は伝授しない内に舞手が亡くなった為、途絶している。

○番付と構成

広原神楽の番付は、表1の通りである。

〔表1〕 広原神楽と島之内神楽の神楽番付

	広原神楽	島之内神楽
1	○壺番舞(2人舞、白装束)	○壺番舞
2	花舞	花舞
3	○鬼神(着面、1人舞)	○花の鬼神
4	^{クリオロン} 繰卸	繰卸
5	鬼神	繰卸鬼神
6	○將軍舞(弓矢の2人舞)	○將軍舞
7	○芝荒神(着面、1人舞)	○初芝の荒神
8	問神主(神主姿の1人舞)	
9	○4人剣(4人の剣舞10とつながる)	4人剣
10	○中央(御幣を持つ1人舞9と問答する)	中央
11	○中ノ手(着面1人舞、女舞)	○中の手
12	壺人剣	壺人剣
13	岩通	岩通
14	御笠地舞	蓑笠の地舞
15	内宮御祈念	○蓑笠の荒神
16	御笠荒神	
17	問神主	内宮御祈念
18	地祭	保津肆耶
19	神武神楽	稻荷山
20	○7鬼神地舞	狭登昆都
21	○7鬼神	陰陽
22	^{クセマイ} 曲舞	○神武(着面1人舞太鼓の作り物有り)
23	鬼神	4人舞
24	米後舞	7鬼神
25	綱地舞	○曲舞(白装束2人舞)
26	綱荒神	^{びやっけん} 白紅鬼神
27	問神主	綱の地舞
28	○綱切鬼神(着面1人舞蛇切り舞)	綱の荒神
29	○伊勢ノ神楽(神主の舞)	伊勢御神楽
30	手力	○天の手力男(着面1人舞)
31	戸開	○戸開(着面1人舞天岩戸を開く)
32	諸神法楽	諸神法楽
33	神送	神送

○印は現在奉納されているもの

現在は、○印のものが奉納されており、社日神楽では、修祓・献饌の後に壱番舞（ホシャンメ）を必ず奉納し、その後は順不同で適当に行うという。ただし、社日神楽は神社拝殿内で奉納されるので、ある程度の広さが必要となる綱鬼神は奉納されない。また、庭神楽となる秋の大祭時には、綱鬼神が神楽のクライマックスとなり、その後、伊勢の神楽で舞い納める。いずれの神楽舞も四方固めが行われ、（現在は省略して二方固めとなっているものもある）また舞の後半は“くやし”と呼ばれるテンポの速い部分に変わることが多い。壱番舞はホシャンメとも呼ばれ、神楽の基本となるものだが難しいので、鬼神や荒神の舞に習熟した者が次に習うのだという。2人舞で、白の狩衣に烏帽子を着用し、鈴と扇を持つ。袖を巻き上げる動作等が続いた後に、後半で扇を開く。鈴は終始鳴らしている。鬼神は、荒神と共に初心者が最初に教えてもらう舞だそうで、鬼神面を着用し、いわゆる鬼神装束をまとい、毛頭をつけ、鬼神棒を持ち、また扇も使う。広原の鬼神棒は木製でかなり太く、どちらかというやや短めの物を使う。荒神舞も同様であるが、面を最初から着けるのではなく、一旦神前に向かって拝礼した後、箱に用意された面と毛頭を着用する。将軍舞は弓矢を用いた2人舞で、黒い毛頭をかぶるが、鬼神の毛頭と異なり、“河童の皿のような”（舞を見た小学生がそう呼んでいた）頭頂部が目立つものである。（写真1参照）弓を使う部分、矢を使う部分、弓に矢をつがえて舞う部分等々変化に富み、かつアクロバットの激しい動作も入る。4人剣は将軍舞と同様の装束の者が4名剣を使って舞った後、中央と呼ばれる白狩衣で御幣を持つ者と東西南北の問答を行う。（写真2、資料参照）その後、中央が一人で舞う。中ノ手は女舞で、能面様の女面に冠をかぶり、緋袴に白千早を着用し、大型の三角幣と扇を使う。（写真3参照）綱切鬼神は、着面の一人舞で、祭壇に祀ってあった藁製の雌雄の蛇を伶人たちが十字形に伸ばして引っ張っているのを、鬼神が刀で断ち切るものである。（写真4参照）この鬼神



写真1（将軍舞）



写真2（四人剣）



写真3（中ノ手）



写真4（綱切鬼神）

舞は従来の鬼神，荒神と舞い方も装束も異なる。(刀を抜くまでは似ている。) この後で舞われる伊勢の神楽は神主の舞で，優雅で複雑な難しいものなので，現在は井野氏しか舞えないそうだ。

○祭場・面・装束など

社日神楽の祭場は神社拜殿内である。正面に祭壇を設け注連を張り，拜殿の四方に大型の御幣を立てておくだけの簡単な設営である。正面向かって左手に笛と銅拍子と他の伶人が座し，下手に太鼓と何人かの伶人が座する。正面向かって右手は氏子総代らが座する。11月の大祭での庭神楽では，正面にみこしを据えて祭壇を作り，紋入りの幕を張って神座とする。祭場は特に注連で

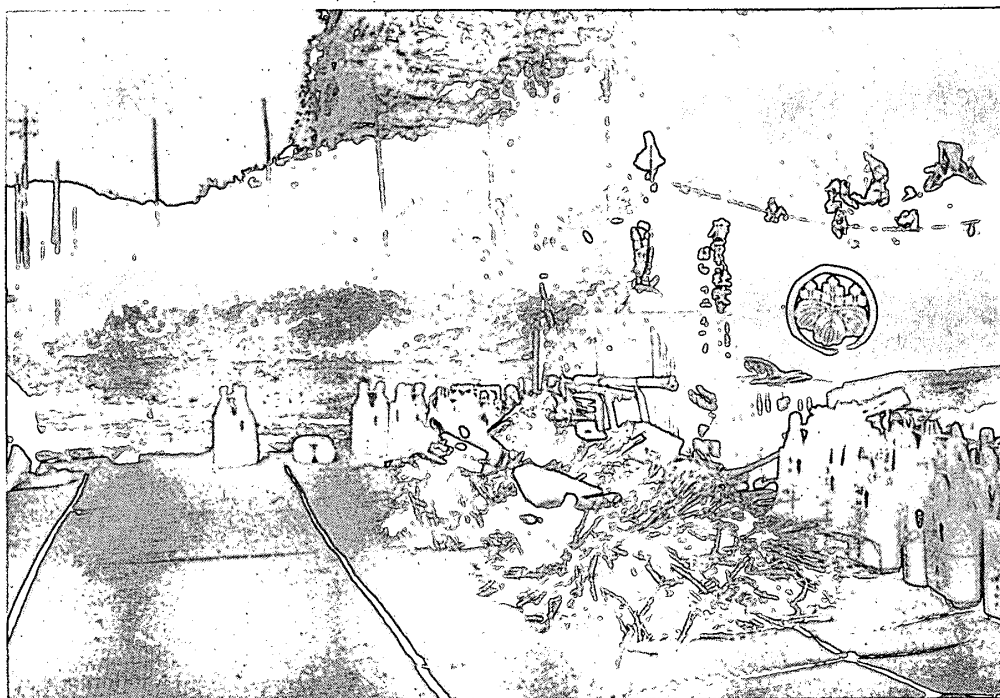


写真5

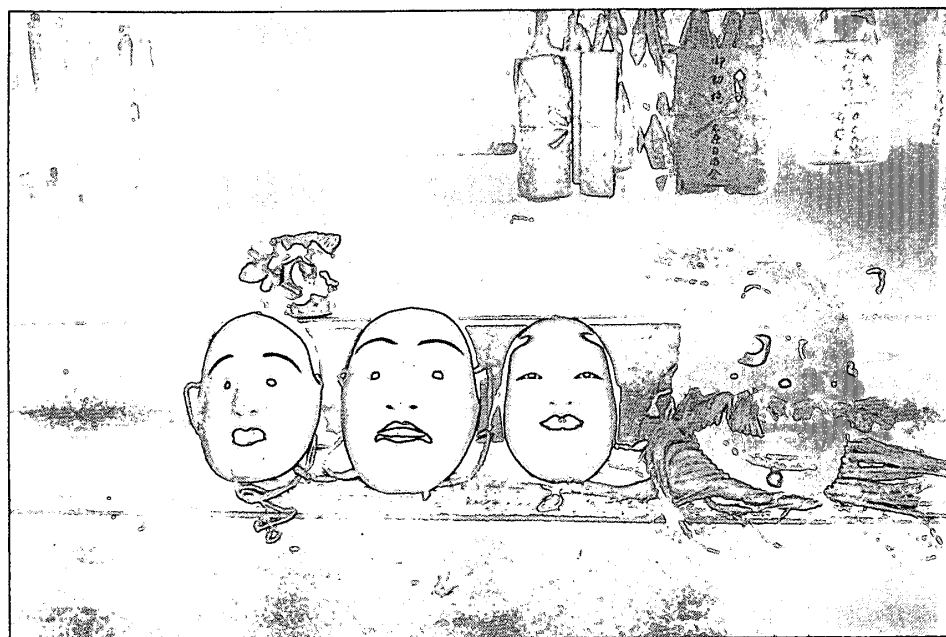


写真6 (左から2番目が中ノ手の面1番右が鬼神，荒神面)

囲ったりはしないが、約二間半四方で舞われるという。また、正面左右には綱切に使われる蛇がとぐろを巻いて据えられている。(写真5参照)

面は、かなり能面に近いものが使われている。(写真6参照、鬼神、荒神面は鬘系であろう。)

装束については前記で概説した通りである。他の神楽伝承地と特に異なるものがあるとすれば、毛頭の毛の量の多さであろうか。鬼神、荒神はじめ(白毛頭)黒毛頭の将軍、4人剣及び中の手のいずれもがフサフサとしたかぶり物である。採物も前述した通りである。鬼神や荒神の棒が太いことは木製であることも含めて特記すべきであろう。なお、この棒には2通りあって、棒の飾りが全て白いものと色紙が混ざっているものがある。

なお、昭和30年位までは、浜下り神事の後に正式な祭場を作っていたようだ。

井野氏の記憶によると、2間半四方に椎の木を立て、間に適宜補材を入れながら注連縄で結んで囲った。次に、その四隅に長い色紙の御幣を立て、東西南北を示した。(ex, 南は黄色、北は青等々)正面のひもろぎの後に竹の丈高いものを1本立ててその頂上の回りを藁づとで巻き、造化の三神、天七代、地五代神を示す御幣を直角に突き刺す。(おそらく小松や生目などの神楽祭場と似ていたと思われる。)次に、頂上に竹製のボールをつるし、幣で飾る。繰下しの舞の時に、扇の代わりに左手に竹のボールを持って注連の縄をより合わせ、また元に戻す、ということが行われ、その後、注連を切ったとのことだ。市内の大塚神楽や米良系の山間地の神楽に繰下し舞として、舞手が注連を引いている縄をより合わせてほどもものがあるが、それらと似た形だったのかもしれない。

○舞いぶり

広原神楽の舞いぶりは、一般に、テンポが速くて軽快である。しかしながら、むやみに跳躍するのではなく、どちらかというと水平的で、腰を落とした舞いが多いように思われる。舞の種類は12種類ぐらいだそうだが、いずれも軽く足を踏み、足腰に弾力を持たせて舞うのが上手とされ、特に荒神舞などはなるべく腰を低くすると言われている。また、左右に手を開いて腰を引く立ちの動作が壺番舞などに目立ち、能の動きと似ているとも言えるだろう。また、伊勢の神楽は基本的にすり足を使うが、時々腰を落としつつ足裏を見せて着物の裾をなびかせる動作がある。(本来足の裏を見せることは神に対して失礼ということになっているようだ)

○音楽的要素

ア. 楽器について

囃子として、太鼓、銅拍子、笛の3種類が使われ、各1名ずつで奏する。太鼓は大型の締め太鼓で外径58cm、胴径42cmで、この種の神楽太鼓にしては小さめの方であるという。バチは曲がったものを用い、また材質も軽いものが好まれ、カジの木が使われているとのことだ。桐で作った新しいものもあるが、そちらは重いのであまり使わないらしい。バチの長さは約41cm、直径1.5~2cmで、左右アンバランスな場合は左手側に重い(長い)方を持つそうだ。銅拍子は径18cmの真ちゅう製で、中央のヒモを持ってたたき合わせる。笛は縦笛で、ヒダケ或いはヘイダケと呼ばれる竹を切って作ったり、他所で買ってきたりしているとのことだ。筆者が取材したものは全長約32cm、径1.7cmで6孔の細い笛である。指穴は約2.5cm間隔であけてある。吹口から第1孔までは14

cmあり、指穴が下半分に集中している。太い笛もあつたらしいが、他所に貸した時に取り違えられたとのことだ。細い笛が良いと言われているが、もっと良いものはないかと模索中だそうだ。

イ. 曲について

各々の舞にいくつかの楽節が組み合わさってでき上がっているらしいが、細かい分析は次回にしたい。今回は基本といわれている壱番舞の太鼓のモチーフのみを記した。(楽譜1参照)概して言うならば2拍子系の軽快なリズムで付点のリズムも多い。また、譜面では表現しきれないが、表情豊かな幅広いダイナミックを持つ。島之内のものと比較するならば、かなり自由な型であろう。銅拍子はほぼ同じか2拍子の基本リズムを刻んでいるらしい。笛は、民謡の音階が使われており、拍子不合の自由リズムの部分が多い。もっとも、笛は自己流である、とのことであるので、まだ他の型も考えられるであろう。(ただし、現在の笛の奏者は1名だけであるので、今のところ唯一の曲である。)

また、神歌も入っているが、比較的ビブラートの少ない唱法のような。神歌も詳細は次回に回して、今回は詞章のみを記す。(資料参照)

〔楽譜1〕

広原神楽の壱番舞の太鼓

$\text{♩} = 80$ (打ち鳴らし)

f > > > *accel.* > *ad.lib.*

> *poco a poco accel.* > *ad.lib.* > >

> > > >

> > > > >

> *rit.* > > >

$\text{♩} = 92$

f > *p* *ad.lib.* //

accel. > >

(杵打ち)①

皮面打ち

repeat ad. lib. > p

♩ = 94

> >>> > p > > > p p pp >

> f p > p > >

> p p

♩ = 80

銅拍子

♩ = 90

銅拍子

p

f > > > > p

pp

f > (p) >

杵打ち②

〔資料〕

御神楽円記

大々神楽番付

1. 御清浄
1. 勸請御祈念
1. 老番舞
1. 花舞
1. 鬼舞
 - 花かとして折りに来れば花でなし、昔の花のにおいこそすれ。
 - 住吉の松の木を眺むれば、月落ちかかる淡路島かげ。
1. 繰下
1. 鬼神
 - 繰下す神のみ前にいとほえて、君に千年を仰ぐおおぬさ。
 - 立返りまたも見まくの不思議かな、みもすそ川の瀬々の白波。
1. 將軍舞
1. 芝荒神、問神主
 - 唱祈由
 - 月輪、照るの御玉と天地に、照り通らす日の大神の道はこの道。

以上2回唱和。

- 神主 再拝再拝、年の中より月を選び、月の中より日を選び、即ち今日の吉日を以て是のすが地に神籠立て、天照大神を始め八百萬神達を勸請し奉り、大々のお神楽を奏し奉る。然るところに浮出まします御神明、不審なり、御詫言をしませ。拝聞仕りまするでござる。
- 荒神 そもそも三宝大荒神とは我が事なり。この所に奏上致さる神楽の根源の儀を早々申せ。
- 神主 御詫言うけたまわり驚き入りましてござる。奏上致す神楽の根源の儀は、お示しを願ひ奉ります。
- 荒神 如何に神主。申さるる通り、この所に天つ神国つ神を祭り、広原神社の大前に奏上致さる神代の古風、御神楽の段、これによりて柴神に出現し、神主願わるる通りわれ権現、み柴に争い浮出これあり。北の柴

榊の本義 1 巻ことごとく神主ひろめ申されよ。

- 神主 然らば柴榊の儀、あらまし申し上げます。かの御柴は、天照大神、天岩屋にこもらせ給う時、御光奉らんとために、天児屋根命、謀を以て香具山の五百真榊を根こじめし、天岩戸の前に植えて三種の神宝を飾り給う。上つ枝には八坂丹曲玉をわたり、中つ枝には八た鏡をかけ、下つ枝には青にぎて、白にぎてを取りかざして、天宇受女命、手力男神、思兼神及び八百萬神達、お神楽を奏し給うと。かの御鏡及び曲玉、青にぎて、白にぎてを渡らせ給う故は、いかなる所以を以て渡らせ給うや、細々御託宣なされかし、聴聞仕りとうござります。
- 荒神 如何にも神主、よき所の不審なり。それ、北の柴真榊に飾り給うは、榊は本義に日く、夏冬にかけて葉茂る故にまさかきの義あり。御鏡は日の神のひょう代。曲玉は月の神の表装。宝剣は静肅の理をあらわす。幣帛はもとより天つ金木と称する時は金なり剣なり。ここを以て柴真榊にかけ給う。北の三神三天の表装あり。神主しんだん致されよ。
- 神主 御託宣聴聞仕り、御神徳の程驚入りましてござる。それ、曲玉は仁温の徳を司り、御鏡は誠明の徳を表し、御剣は正義の徳を称し、天が下の政を治むと得心仕つてござる。
- 荒神 神主もつとも願聞入れ、託宣授くるであろう謹んで聞得召されよ。神霊は、あわれみの深き心の玉なれば、天御孫にそえて立たしつ。宝剣は、是又国を治むる印とて、同じ御床に祭りき。内待所は宿す影一つのちりの残らぬを心せよと贈る鏡ぞ。かくの如く神代の昔、八た鏡の如く明らかに照らし給うこの御神徳を讃敬し、神主口説申されよ。
- 神主 御託宣有難く得心仕つてござる。然らば誠明天地三界、草木すべて時を違えず、神仏たれせつせず、これ神道の大極なりと承つてござる。ここに榊の光連ね申すでござる。
榊葉のいつの時にか生いそめて、天岩戸の淵となるらん。
かくの如くでござる。榊の意味も御柴の儀も解けたり。この上はお許し下され、かんべんこうむりとうござる。
- 荒神 成程殊勝な神主、再拝口説致されよわが権現も託宣を以て許しとらすであろう。そもそも汝よ苦行、それ神明は怠らず敬い申されよ。かくの如く納上。

唱祈由

- 有難く存じ奉つてござる。諸々の成り出づるものは、神美結、高美結神のむすびぞ。

1. 4人剣、中央

- 中央 そもそも、天地始まってよりこの方、進来度々相戦うといえども、神后三尊を征し給いしより国土安全、諸願成就の所、各々四方に神達ましますこと甚だ以て不審なり。先ずこれより東方に出現まします御神の御託宣やいかに。
- 東方 そもそも東方と言つば、甲乙の木神の方なり。かの方に六萬六千六百六十六神の岬あり。彼の岬の中に悪魔の岬を不去不來のその為に、天八百火結命と現じ、宝剣を持し、寅卯を守護の所なれば、いかでや彼の方より悪魔来らん。
- 中央 そもそも、東方の由来承つて候がさて、これより南方に出現まします御神の御託宣やいかに。
- 南方 そもそも、南方と言つば、丙丁の火神の方なり。彼の方に七萬七千七百七十七神の岬あり、彼の岬の中に悪魔の岬を不去不來のその為に、天合結命と現じ宝剣を持し、己午を守護の所なれば、いかでや彼の方よりも悪魔は来らん。
- 中央 そもそも、南方の由来承つて候がさて、これより西方に出現まします御神の御託宣やいかに。
- 西方 そもそも、西方と言つば、庚辛の金神の方なり彼の方に八萬八千八百八十八神の岬あり、彼の岬の中に悪魔の岬を不去不來のその為に、天八百万火結命と現じ、宝剣を持し、申酉を守護の所なれば、いかでや彼の方よりも悪魔は来たらん。
- 中央 そもそも、西方の由来承つて候がさて、これより北方に出現まします御神の御託宣やいかに。
- 北方 そもそも、北方と言つば、壬癸の水神の方なり彼の方に九萬九千九百九十九神の岬あり。彼の岬の中に、悪魔の岬を不去不來のその為に、天御降結命と現じ、宝剣を持し亥子を守護の所なれば、いかでや彼の方よりも悪魔来らん。

- 東方 そもそも、四方の由来承つて候がさて、これより中央に御立ます御神の御託宣や如何に。
- 中央 そもそも、中央と言つば、戊巳の土神の方なり彼の方に十萬一千神の岬より、彼の岬の中に、悪魔の岬を不去不来のその為に、天八降結命と現じ青黄赤白黒の御幣を捧げ、丑未辰戌を守護の所なれば、いかでやこの方よりも悪魔出でん。
- 東方 そもそも、中央の由来承つて候がさて、これより天はいかに。
- 中央 そもそも、天と言つば天は三十三点なり。中にも伊佐奈岐命のまします天なれば、いかでや天よりも悪魔は降らん。
- 東方 そもそも、天の由来承つて候がさて、これより大地はいかに。
- 中央 そもそも、大地と言つば埤道地鎮伊佐奈美命のまします大地なればいかでや大地よりも悪魔は起らん。
- 東方 そもそも、東南西北、中央、天大地の由来まで承つて候がさて、これより御手中やいかに。

1. 中の手

- 山の神誰が立てそめしみてぐらか、嵐もたけき寒きところに
○あたらぎの里より吹くは神風か、吹けば露けきあたらぎの里

1. 老人剣

1. 岩通

1. 御笠地舞

1. 内宮御祈念

1. 御笠荒神、問神主

唱祈由

- 天地の極み、御照らす日の大神の道はこの道。

以上二回唱和

- 神主 三笠操下しと言うは、高天原より月の御蔭笠、日出笠、蓋笠を投げ給う。その笠、日向国高千穂に落ちつき給う。その麓に三田井と言う所あり、人の時かざるに稲生え出づると言う。これ即ち神国の不思議なり。その稲を持帰りて宇賀乃御玉尊は天御孫に給う。故に稲荷の神とこそ名づけ給うと承つて候。かように御唱祈由奉りましてござる。
- 荒神 そもそも、三宝大荒神とはわがことなり。そもそも、天地に神あり。樹木これによつて栄ゆ。神霊あるなくんば、ふくそうの効何ぞなからん。きかんかくの如し。
- 神主 差しあたり、当惑でござる。
- 荒神 いや神主、この所にお神楽を飾り申されたにつき浮出これあり。然るに神主、三笠根源の儀は如何様と心得申さるるか、つまびらかに広め申されよ。
- 神主 実に無学なる神主の儀にござりますれば、三笠根源の儀は少しも存じ至りません。何卒、お示しを願い奉りましてござる。
- 荒神 いや神主、飾り申されたについて知らずとはいつわり、早々に申せ。
- 神主 然らば三笠根源の儀、あらまし申上ぐるでござります。建速須佐之男命、葦原の中つ国に追いやら給う時、氷雨降りぬ。よつて須佐之男命、青草を結うて箕となし、櫛の葉を集めて笠となり給うと。これ即ち三笠根源の儀かと心得ましてござります。
- 荒神 よく心得申された。こまごま広め申された。
- 神主 さて、こまごま聴聞仕り得心に納めましてござります。しかしながら、神主、三田のわけ、何とも心得難うござりますれば、このみぎりにお指し示しを願います。
- 荒神 よく得心申された。知らんと申されたにつき指し示す。天安田、天平田、天村合田これ即ち大神宮の三田と心得申されよ。
- 神主 実にお宣りの程承り、神主得心致しましてござります。もうこれにてお許しを願います。
- 荒神 許しはまだはるばる。随分以て敬い申された。われ権現宣して納上。そもそも君臣の分、臣を以て三たることなし。然れば即ちわがしょうえんの意を体してなり。きかんかくの如し。難行苦行、それ神明怠らず敬い申せ。かくの如く託宣納上。

1. 地祭

1. 神武神楽

- ホッシャ ほのほのと、月の出づるに驚いて、天岩戸に深くなるらん。
- 住吉の塩なれ衣はるばると、ここはなぎさの浜松や、風吹き上げの波高く、高天原に着きにけり。高天原に着きにけり。
- この所にまかり立ちたるは、如何なる者と思召す。われこそ通りのホッシャにて候。
- ようよう急ぎ候程に、高天原につきにけり。しばらくこの所に逗留致し天岩戸を祈り奉れども、神明未だ御納上見えなく候程に、これより稲荷山を請じ奉りて、ともに岩戸を祈らばやと存じ候。稲荷山やます。稲荷山やます。
- 稲荷山 此所はもとより、高天原に神集いて歌をうたい舞をまい、う楽をなせども神明未だ見え給わず、千早の袖をかざしつつ、千早の袖をかざしつつ伊勢の国にぞ帰り行く。伊勢の国にぞ帰り行く。
- ホッシャ これまで稲荷山を請じ奉りて、ともに天岩戸を祈り候えども、神明いまだ御納上見えなく候程に、これより里人を請じ奉りて、ともに岩戸を祈らばやと存じ候。里人や在す。里人やます。
- 里人 今、なれぬ神の声として里人を召されしは、そも何の子細によりて召されしならん。
- ホッシャ 里人をこれに請じ奉るは別な儀にてもなし。天岩戸を祈りまつれども、神明いまだ御納上なき程に、里人を請じ奉りて、ともに岩戸を祈らばやと存ず。さあて、上うのいわれは如何。
- 里人 いや、不肖が身として知るべき事なけれども、その上うのいわれ、あらあら語つて聞かせ申さん。

そもそも、天神12代の神達は

第1に天御中主神

第2に高見結神

第3に神結神

第4に宇末志葦可比彦知神

第5に天常立神

第6に国常立神

第7に豊雲野神

第8に宇比地仁、須比地仁神

第9に角久比、活久比神

第10に大斗野辺神

第11に思足吾屋賢根神

第12に伊佐奈岐、伊佐奈美神

とや申すらん。さて又、地神五代の始めは

第1に天照大御神

第2に正哉吾勝勝速日天忍穗耳命

第3に天津日高彦穗仁仁杵命

第4に天津日高彦火火出見命

第5に天津日高彦奈岐佐鷄加屋吹不合尊

とや申すらん。

あな面白の日本ぞや。さて又、国をつくりては豊葦原中津国とや申すらん。あるにつけてよく見れば、石や俄々としてその岩組の巖や。大神ここにませば諸神これを仰ぎ見給う。大神も諸神も、高天原で何さんや始めつつ、いかでか神も擁護あらせ給わねば歌居を措いてこの尉も御山隠れと立ち行く、御山隠れと立ち行く。

- ホッシャ のうのう、是の尉殿、これにお入り候えやもの申すべき事の候。
- 里人 また何事ならん。
- ホッシャ ああこれに見ゆる御山は、如何なる御山とや申すらん。
- 里人 ああれをこそ鏡の御山と申すらん。
- ホッシャ さあて国はいかに。

- 里人 豊葦原中津国とや申すらん。さあて、このたまう真意は如何に。
- ホッシャ なにみかどの事にてもてなし。通りてんの事なり。通りてんによの事なり。
- 里人 通りてんによと聞けば好むべく、何れ神心今や何をか包むべしとうち現れて、この尉も教えけるこそあらたなれ。大神も諸神も、高天原で何さん始めつつ、如何でか神も擁護あらわし給わねば、歌もおいて尉も岩戸隠れと立ち帰る、岩戸隠れと立ち帰る。
- ホッシャ 是まで里人を請じ奉りて、ともに天岩戸を祈り候えども、神明いまだ御納受見えなく候程に、これより陰陽な請じ奉りて共に岩戸を祈り奉らばやと存じ候。陰陽やある、陰陽やある。
- 陰陽 ほのぼのと三璽をとればこの里に、月の光も明らかに。
(これより中臣祓となる)
- 陰陽 通りのホッシャ、通りの小命児、茂山の上樹、なん天の陰陽参り、共に天岩戸を祈らばやと存じ候えども、神明いまだ御納受見えなく候程に、是より神武を請じ奉りて、共に岩戸を祈らばやと存じ候。神武やます、神武や在す。
- 神武 神風や五十鈴の川の宮柱、千歳までとぞ祝いそめける。
- 第6代には2つの尊、天神12代地神5代、末代の衆生に縁を求めんその為に、熊野三社権現と現れ給うことも捧げなや。三宮に御戸開き屋開きの声として神武を召され候は、そも何の仔細よつて召され候やらん。
- 陰陽 ああれを御覧候え。天照大神な世をむさぼり天岩戸を閉じ給うによりて、日月の光も失せ、人草万物増長得がたし。神も座し座しがたし。又、人も住み難ければ、通りのホッシャ、通りの小命児、茂山の上樹なん天の陰陽参り、天岩戸を祈り奉れば、神明も早や御納受と見ゆる程に、神武を請じ奉つて次の神楽を奏せばやと存じ候。さあて、彼の太鼓のいわれは如何に。
- 神武 かの太鼓のいわれとや、かの太鼓のいわれとや。かの太鼓のいわれならばあらあら語つて聞かせ申さん。山水に苔むすといえども、我等が久しく持ちて打ちたる太鼓にて、かの太鼓を打ちては弓矢の神をいさめ、花のもとに来つては眺めんために夜もすがら、うちも寝ずして打ち忘れ、御戸にこもりませ神達や、神より御授なし申さんが為一切衆生諸神諸大明神。

1. 七鬼神地舞

1. 七鬼神

- 住吉の松の木の葉を眺むれば、月落ちかかる淡路島かげ。
- 立返りまたも見まくの不思議かな、みもすそ川の瀬々の白波。

1. 曲舞

1. 鬼神

- 伊勢に来て伊勢とは如何たづぬべき、伊勢のみなれや伊勢ぞいせいせい。

1. 米後舞

1. 綱地舞

1. 綱荒神、問神主

唱祈由

- 神主 そもそも、三種の神宝とは、須佐之男命、二柱の御神の詔に従いて、底津根国に降り給う時に月辰に向いて泣きつつ仰せの一言を思えば、この命、誠は悪行の御神明にあらざることを知る。これはこれ、我が神道は、善悪一義を以て本義とする。これによりて、八岐大蛇とは、はしき迷の体なり、の正へんなり。その故をたづね給えば、この宝剣は天御孫に伝え、天が下百王の神宝としてまさに天地ときわまりなく納め奉ると承つて候。
- 荒神 そもそも、三宝大荒神とはわが事なり。天地に先立つて神あり。かるが故に陰陽分かれて五行となる。然れば即ち我が権現は正縁なり。汝、事のいわれを早々申せ。聞かん。詫宣かくの如し。
- 神主 さてさて、最前より殿の御神明の浮出かと存じ、御前にまかり立ちましたる所、三宝大荒神の御出現にござります。かの尊は、最前、柴、三笠に争い、納上のところに又々浮出されまするわけ、何とも不審に存じます。
- 荒神 殊勝な神主、この所に御綱を取飾られたについて、出現してこれあり。如何に神主、御綱根源の儀は如

何ようと心得申さるるか、審らかに申されよ。

○神主 お見渡しの通り、無学の神主にござりますれば御網の義も存じ至りませぬ。

○荒神 至らんと申されたについて指し示す。須佐之男命、高天原より出雲国火の川上に降ります時に、音泣くの声あるをきき、これ何ぞと問い給う。足名津地、手名津地申さく、この乙女はわが子なり。櫛稲田姫という。八岐大蛇に吸われなんとす。故にかく泣くと申す。須佐之男命、この乙女を我に呉れんやとのたまひ、かの大蛇を切断し一つの剣を得給う。これいわゆる天村雲剣なり。然うして後、出雲国の須賀地に宮を建てて鎮まり給う。これ即ち大社神ぢや。かくの如く心得申されよ。

○神主 御網根源の儀、こまごま聴聞仕り神主得心に納めましてござります。もうこれにて御網お許しを願います。

○荒神 はるばる随分以て敬い申された。返すがえすも敬い申された。我が権現もえらん。詫宣して納上。そもそも、須佐之男命の剣は土地の陰なり、天村雲剣と言ひ草薙剣と言ふ。日本武尊、東夷征伐の時、草をなぎて火災を逃れ給うなり。かるが故に、五こく万物一切成就するものなり。かくの如く納上。

1. 網切鬼神

1. 伊勢ノ神楽

○そもそも、天照大神、須佐之男明神の悪しき御行のその為に月と日とをば奪取りて天岩戸にとちこもり給えば、日本国中は常夜の闇となる。その時、八百諸神達岩戸の前に集いて、天太玉命をば高天原より天香具山に遣わし給ひ、榊と言ふ木を根こぎになして、上つ枝には内侍所の御鏡を掛け、中つ枝には青にぎて、下つ枝には白にぎてを取り飾り、これを即ち神の体として七日七夜の御神楽を舞い給う。その時、大神の思召すようは、八百万神達は何の嬉しさにかく神楽を舞い給うやと、ほとどに開けてみそなわし給えば国中はおぼろ月夜となる。その時、戸隠明神な力強き神なれば、扉を取りて引放し、日向国櫛ヶ原に投げ給う。即ち手力男明神、月と日をば御手にいざなぎて天岩戸を出で給えば、日本国中はもとの昼とぞなる。

1. 手力

○暗き夜に天岩戸を明けにけり、小夜更けてこそ尊かるらん

○榊葉を何時の時にかいわいそめ、天岩戸の淵となるらん

○立返り又も見まく不思議かな、みもすそ川の瀬々の白波

○不思議やな、七日七夜の御神楽を舞い給えども、遂に大神なめでも出でさせ給はん候ものかな。いざや、かの所に戸隠明神ましまさば、ああの天岩戸をとつて御け候い、大日月の御光を一切衆生に拝ませ申せん。

1. 戸開

○そもそも、戸隠明神とはわが事なり。

○不思議やな、七日七夜の御神楽を舞い給えども、遂に大神なめでも出でさせ給わん候ものかな。いざや、かの所に手力男明神ましまさば、ああの天岩戸を取つて御のけ候らい、大日月の御光を一切衆に拝ませ申さん。

○手力男 月と日と同じ連れなめや、月と日と去ぬる所は一つなり。

1. 諸神法楽

1. 神送

また、太鼓の杵打ちがこの神楽の特徴の一つだが、高千穂神楽などと違い、太鼓奏者が一人で奏し、(写真7参照)また、杵打ちの部分と太鼓の皮面を打つ部分とをはっきり区別していて、皮面打ちと杵打ちが交わる型はない。

(2) 島之内神楽

○由来と目的

島之内神楽もその由来等は不詳である。前述したように、古文書等が焼失しているので神社そのものの由緒もはっきりしない。井野氏によると、鬼神舞の型などが旧住吉区内では最も複雑に



写真 7

なっているので、下那珂神社→広原神社→新名爪八幡神社→島之内八幡神社と舞が伝えられていったのではないかと、いうことである。最も盛大に神楽が舞われるのは秋の社日である。島之内地区の全区会の各区長の下に総代を置き、その中より委員を選出して運営にあたっているという。秋の社日当日は早朝浜下り神事を行い、(現在はやっていないらしい)戻って来て壺番舞を奉納して朝食、その後昼食まで次々と奉納される。昼食後、午後3時すぎ位まで舞われ、(戸開が最後)その後直会を行い、夜は地区総会が行われるという。合間に附属の幼稚園児たちに鬼神舞を特別に見せたりするが、他所のように“せんぐまき”の時に人が集まってくることは少なく、また平日であっても日程の変更はないので、娯楽性よりも神事性を重んじていると言えよう。

○番付と構成

島之内神楽の番付は表1の通りである。壺番舞、2番舞は、やはりホシャンメと呼ばれ基本となっている舞である。白狩衣に黒烏帽子で、鈴と扇を持って舞う。筆者が取材した折は、やはり若手には難しいのか、ベテラン師匠である8人の伶人たちのうちの2人が舞っていた。鬼神舞と荒神舞は若手が受け持っており緋袴に陣羽織の鬼神装束で、毛頭をかぶり、面棒と扇を使う。この面棒も木製の太い棒で、広原のものよりはかなり長く、舞っていると天井の蛍光灯にぶつかると心配になる程である。ただ、荒神の方は舞の前半で左袖のたもとをつかんでおり、以前はたもとに隠しておいた柴の葉をまいたりした、とのことで、その所作の為なのか、袖の内側が握れるようになっている。中の手は広原と同じく女面と女装束をつけ、扇と三角幣(女幣といわれることもある)を使う。神武は他のものとは異なり、毛頭に鬼神装束をつけて神武面を着用するが、太鼓とも鳥居とも呼ばれる四角い採り物を別の伶人が支えている所へ、太鼓のバチと目される2本の小型の色鮮やかな鬼神棒で太鼓をたたき仕草をする。ここで午前の部が終わり、午後の鬼神舞へと移る。鬼神は幼稚園児たちに見せる為に再度舞われた。將軍は弓矢の舞で鈴→弓→矢→鈴の順に採り物を変えて舞う。曲舞は、壺番舞等とほぼ同型であると考えられるが、扇舞から御幣舞、素襖舞、鈴舞と変化し、大島や村角の花舞と類似のものと思われる。最後の手

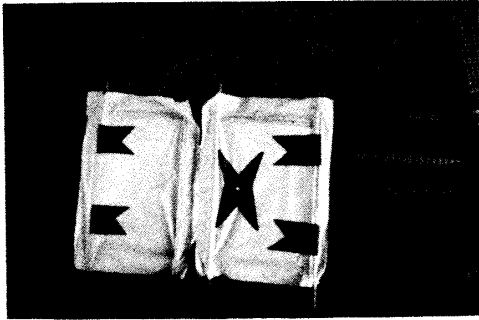


写真8 (天の岩戸を表わす採物)

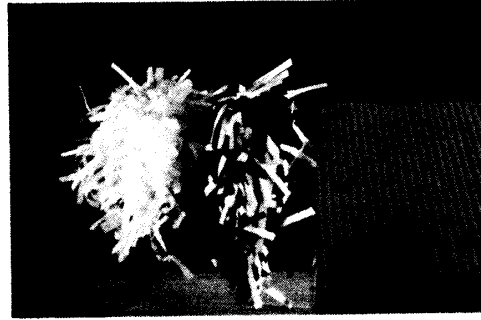


写真9 (左が月・右が日を示す採物)

力は、岩戸開きの舞で、舞も採物も特徴がある。手力男命とウヅメノミコトが交互に舞い、岩戸の採物(写真8)を取って投げ、日と月の採物(写真9)をかかげ持って舞う。非常に象徴的な戸開の舞で洗練されているのではないだろうか。

○祭場・面・装束など

祭場は神社拝殿内に用意される。正面に祭壇を設け、拝殿の四囲に計12本の長い御幣を立てかけてある。正面の祭壇には各種の採物が置いてあり、(写真10参照)向かって左側に伶人たちが座し、太鼓・笛・銅拍子の奏者もやや上手寄りに座る。正面左手には舞人が出入りする仕度部屋がある。見物人は拝殿内に上がるか、賽銭箱の置いてある階段側から見る。また、この拝殿の中央天井には“アマ”と呼ばれる天井飾りが吊り下げてあり、(写真11参照)白紅鬼神びやつきんの時にその下で舞うという。採り物やこのアマは以前は毎年作り変えていたそうだが、現在は同じ物を続けて使っているとのことだ。装束採物については前述した通りである。面はいつ頃作られたのか分かっていないが一部能面に似たものもあるようだ。(写真12参照)また、広原神楽と同系統と思われるものもあれば、全く異なる古型を残す面もある。翁面風の2面は現在使われておらず、何に使われたかも不明とのことだが、南九州に多い翁面以前の型のものと思われる。鬼神、荒神面も比較的大型の植毛された型であり、これらも古型をうかがわせる。面だけで判断するならば、能成立期前後にさかのぼるか、その時期に作成された面の複製を使っていると言えよう。

○舞いぶり

井野氏が指摘されたように、広原神楽よりは舞が多少複雑になり、動作が大きくなったりしているだろう。詳細な比較は文章にし難いが、基本となる舞はより重心を低く腰を引く為、(写真13)能に似てきており、また荒神や鬼神の棒のふり方が複雑で大きな動きとなってきた。また、

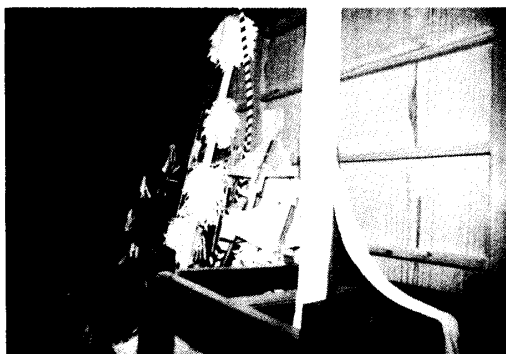


写真10

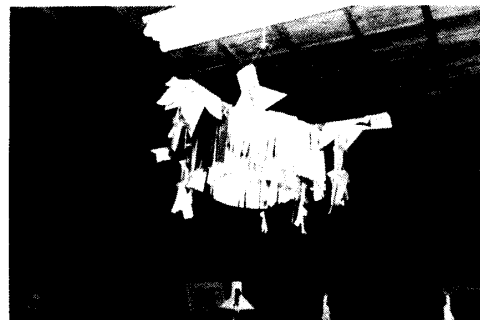


写真11

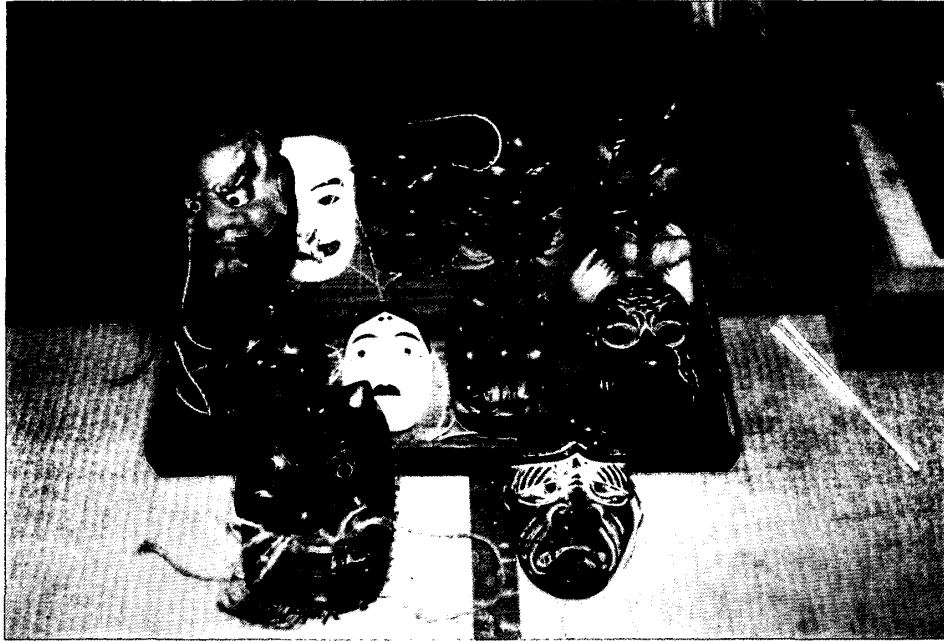


写真12 (上列 左より陰陽・戸開・鬼神・鬼神荒神
中列 左より鬼神・中ノ手・手力男・不詳
下列 左 ホッシャ 右 不詳

※上記の面の名称については多少異同があるかもしれない。

荒神舞では剣道のしゃくとり足や相撲の土俵入りの型を思わせるような舞いぶりがあり、武道との関連も偲ばせる。(八幡神社は武運を願うからかもしれない)舞のテンポは広原と比べると、より速くなっており、また左右に動く所作が大きくなっているように思われる。鈴の使い方は大きく前半と後半に分けられ、前半は縦に鈴を振り、後半の“くやし”では“ザークザク”と横に振るといふ。

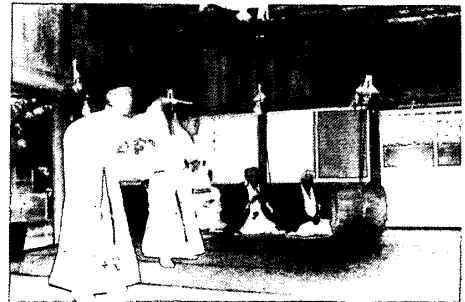


写真13

○音楽的要素

ア. 楽器について

広原と同じく太鼓、銅拍子、縦笛が使われている。太鼓は大型の締め太鼓で外径84cm胴径52cm胴長60cmである。バチは曲がった40cmぐらいの、比較的細くて軽いものを使い、やはりカジの木を使っている、とのことだ。(写真14参照) 銅拍子は直径17cmの真ちゅう製である。笛は縦笛で全長33cm、直径1.8～2cmで、指穴は6孔で、指穴間は1.7～2cmである。(写真15参照)



写真14

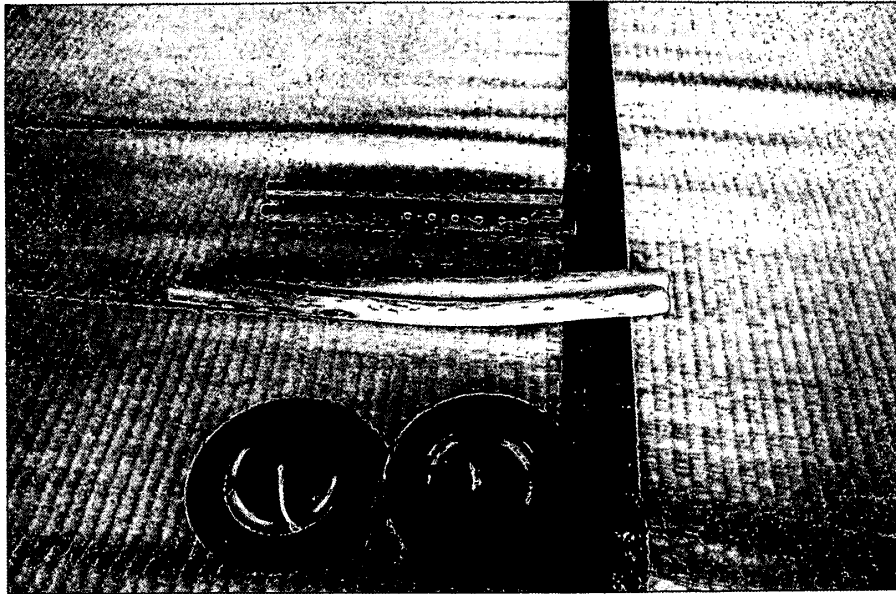


写真15 (上から笛2本, 太鼓のバチ1組, 銅拍子)

イ. 曲について

広原と同じく各々に複数のモチーフが組み合わせてあるようだが、こちらも詳細は次回にして、ホシャンメと呼ばれている曲の太鼓（一部銅拍子つき）パートのみを記した。（楽譜2参照）

[楽譜2] 島之内神楽の奉仕者舞 ^{ホシャンメ}

♩ = 96 (少し余裕あり) - 3 - (打ち鳴らし)

f *p* *p*

♩ = 92 *ad.lib.*

p *rit.* *ad.lib.*

ad.lib.

(舞い始め)

※この部分を適宜くり返す。

Musical score for the dance beginning section. It consists of five staves. The first staff is in 2/4 time with a tempo of ♩ = 92. The second staff has a tempo change to ♩ = 112. The score includes various rhythmic patterns, accents (>), and a section labeled "ad. lib.". A bracket labeled "交互 repeat" spans across the third and fourth staves, indicating alternating repeats. A triplet of eighth notes is marked with a "3" over a bracket.

♩ = 112 枠打ち①

皮面打ち

Musical score for the first frame (枠打ち①). It is in 2/4 time with a tempo of ♩ = 112. The score shows a sequence of rhythmic patterns marked with 'x' for frame beats. The first two patterns are labeled "repeat ad. lib." and are grouped under a bracket labeled "a".

枠打ち②

皮面打ち

Musical score for the second frame (枠打ち②). It is in 2/4 time with a tempo of ♩ = 112. The score shows rhythmic patterns marked with 'x'. The first pattern is labeled "repeat ad. lib." and is grouped under a bracket labeled "b". The second pattern is marked with accents (>) and is labeled "3回くり返す" (repeat 3 times).

枠打ち③

Musical score for the third frame (枠打ち③). It is in 2/4 time with a tempo of ♩ = 112. The score shows rhythmic patterns marked with 'x'. The first pattern is labeled "repeat ad. lib." and is grouped under a bracket labeled "c". The second pattern is marked with accents (>) and is labeled "皮打ち" (skin beat). The final part of the score shows a sequence of notes: a quarter note, two eighth notes, and a quarter note.

杵打ち④

杵
皮

杵打ち⑤

杵
皮

※前記④～⑥の杵打ちのみの部分は両手のバチで同時にたたく。
皮面打ちの入る部分は杵を左手、皮面を右手でたたく。

♩ = 104

♩ = 94

〔笛の音階〕 B-durの律音階

広原のものと同じく2拍子系の付点の多いリズムであるが、全体的にテンポが速くなっている。また、広原と比べると組み合わせ方というか、リズムパターンが整然としており、その代わりディナーミクの幅がやや狭くなっている。(リズムパターンとディナーミクがきっちり入れ替わっている。記譜上は同じ表現でも広原の方が激しく移り変わっていつているようだ。)また、杵打ちと皮面打ちとの組み合わせができてきているのも広原と異なる点であるが、奏者が一人で両方の奏法を受け持っているのは特筆すべきであろう⁴⁵⁾。神歌もふんだんに入っているが、それらは次回に回す。笛も、広原と比べると自由リズム的な部分は少なくなっているようであるが、これも今回は省略する。音階だけを示すなら律音階的な音列を使ってあり、また笛がやや太いので、広原よりも低い音律である。

5. 総 論

まだ全てを網羅してはいないが、ここでこの二つの神楽の位置について概論を述べておこう。

音楽的にみるならば、速いテンポ、太鼓の打ち方(杵打ちが入る等)や笛の動き等が今までに述べてきた旧生目村の系統の神楽とは明らかに異なっている。この太鼓の杵打ちと縦笛を特徴とする神楽は、どうやら旧佐土原藩領内に多く存在しているらしい。全部を確認した訳ではないので明言はできないが、現在佐土原町の巨田神楽、一部西都市に入る都於郡神楽、新富町の新田神楽、富田神楽等がそうであり、演目や舞いぶりに共通するものが多いらしい。さらに目を転じるならば、杵打ちの代わりに楽板等を使うようになるが、山間部の例えば穂北神楽や尾八重神楽にも似ている。(尾八重の「神和」は「中の手」と共通し、4人剣の間答や綱神楽等も一部共通していると思われる。)更に、広原、島之内両神楽とも、正式な庭神楽の飾りつけがなされたなら、おそらく尾八重神楽とよく似た祭場になると推察される。また、一方では、譜例1, 2が大島神楽の「花舞」と比較するとよく似ていたり、また、旧生目村に位置する跡江神楽や有田神楽と類似した演目があったり、(跡江の4人神示は、「4人剣と中央」そのものであるし、有田と跡江の成就(注連切り)の型も似ている。)また、旧住吉村の一部といってもよい村角には、杵打ち太鼓の入る神楽が存在している。それらの背後には、旧佐土原(島津)領であった時の相互影響が考えられるし、また、修験者たちによる伝承も考えられようし、大光寺領や宇佐八幡宮領であったことにも原因があるかもしれない。いずれにしても、注意深く取捨選択していきながら、この両神楽が宮崎の平地の神楽と山間地の神楽の中間点に位置していることを時間をかけて立証していきたいと思う。

(1987年9月30日受理)

注

- 1) 黒木 亜美子 1986 「宮崎市神楽の音楽(Ⅲ) — 大島神楽の場合 —」『宮崎女子短期大学紀要』第13号: 29-47。
- 2) この部分は、「宮崎県地名大辞典」を参考にした。「しまのうち 島之内<宮崎市>」『角川日本地名大辞典』東京: 角川書店, 昭和61年(1986), 第45巻宮崎県, 397頁。「ひろはら 広原<宮崎市>」同644頁。
- 3) 住吉尋常高等小学校編による「郷土の歴史」(昭和10年)には、養老2年(718)10月15日筑

前宮崎八幡宮の分霊を勧請したとの伝えがあり、解除崎八幡宮として伝えたという。

- 4) 誉田別命は足仲彦命の第4皇子で、4歳で皇太子となった為、老臣武内宿禰が輔弼したという。
- 5) 山間地系の神楽や現佐土原町の神楽では、杵打ち奏者（楽板奏者の場合もある）が別に居る。